

Title	講座開設5年目を迎えて
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 3 P.1
Issue Date	1998
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4722
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

講座開設5年目を迎えて

柏木哲夫

早いもので1998年4月より、講座開設5年目を迎えることになる。大学に移る決断をした一つの理由に定年まで10年あるということがあった。10年あれば何かまとまったことができるであろうと思った。その10年が半分過ぎた。何かまとまったことができたかどうかは疑問である。特にまとめる必要はなかろうとも思う。

幸い講座で勉強したいという学生さんは多く、特に大学院を希望する人が多い。すでに10名（博士課程7名、修士課程3名）の院生が居るのでこれ以上増えると、手に負えない(?)とうれしい悲鳴をあげている。学生さんには自由に研究課題を決めてもらうという方針をとっている。一応「老いと死」をテーマにすることが望ましいという曖昧な縛りはあるが、実際的には各自が興味と関心をもつ課題であれば何でもよいと思っている。人間科学部の目的は人間理解であると思っているので、この基本線さえクリアすれば各人の自主性を重んじるというのが、私のスタンスだ。この年報の内容を見ていただければ、スタッフや学生が教授の基本的方針にいかにか忠実であるかがわかる。

講座の人事では、4年間助手を勤めてくれた山本一成先生が臨床に戻りたいとのことで、1997年8月に退職された。山本先生には講座の基礎作りの点で随分お世話になった。この紙上を借りて心からお礼を申し上げる。後任には大学院博士課程の途中ではあったが平井啓助手が就任した。平井助手は講座の1期生でいわば生え抜きである。今後の活躍を大いに期待している。山本恵子助手も研究と学生の指導に頑張ってくれていて、ありがたく感謝している。

私は昨年肺炎で入院し、皆様にご迷惑をかけたが、今年は風邪もひかずとても元気だった。仕事の方は相変わらず忙しくて、講演と執筆をいかに調整するかが目下の最大課題だ。できれば年に一度は国際学会で発表したいと願っている。去年は香港での国際ホスピス大会で発表の機会があった。今年はカナダの緩和ケア学会でシンポジウムを依頼されている。

1998年の春には念願の5階建ての新館が完成し、そこへ講座が移動する。3階に8つの部屋が与えられる。これまで講座の部屋が三つの階にバラバラの状態だったので不便であったが、これで良いコミュニケーションとチームワークができると大いに期待している。日ごろ講座運営に理解と協力を示して下さっている皆様にお礼を述べて結びとしたい。